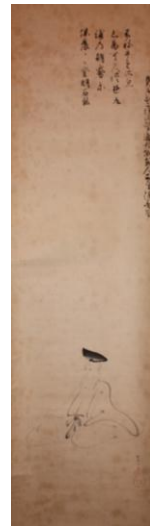


平成22年度購入文化財一覧

【京都国立博物館】(計17件)

- 1 ○種 別 <絵画>
○名 称 柿本人麿像 (かきのもとひとまるぞう)
○作 者 等 狩野探幽筆・中院通村賛
○時 代 江戸時代初期 (1647年・正保4年)
○品 質 紙本墨画
○員 数 1幅
○寸 法 等 縦93.0cm 横26.6cm
○作品概要 「歌聖」として崇拝された柿本人麿の像。直衣の衣紋線の流麗な描線、ぼかしを効かせた水墨描は絶妙で、身体のポリウムが的確にあらわされている。狩野探幽 (1602~1674) の優品で、抜群の技量がしめされている。
和歌の賛者、中院通村 (1588-1653) は、後水尾院歌壇で指導的な立場をつとめた堂上歌人で、款記の「内大臣」から正保4年 (1647) 通村60歳時の書と分かる。探幽の落款の書風からみても、絵と書は同時期、探幽46歳の作とみてよい。
探幽のやまと絵の魅力をよくしめす作品であるとともに、中院通村という堂上人と探幽の直接的な交流をしめす貴重な作品であり、制作年が明確な点でも基準作といえる。
- 購入金額 9,450,000円



- 2 ○種 別 <絵画>
○名 称 やすらい祭絵巻・牛祭絵巻
(やすらいまつりえまき・うしまつりえまき)
○作 者 等 (やすらい祭絵巻) 松村景文画 上田秋成書
(牛祭絵巻) 河村文鳳画 上田秋成書
○時 代 文化二年 (1805)
○品 質 紙本墨画淡彩
○員 数 2巻
○寸 法 等 (やすらい祭) 28.0×324.0cm (牛祭) 28.0×261.0cm
○作品概要 やすらい祭は、今宮神社で4月、都の疫病退散を祈って行われる祭。画を担当する松村景文 (1779-1843) は、兄の呉春のあとを継ぎ、四条派の確立に貢献した。唱歌などを記す詞書は、大徳寺長老の獨菴宗讓、伴高蹊の養子で国学者の伴資規 (?-1810)、上田秋成 (1734-1809) の三者によるもの。
牛祭は、太秦の広隆寺で10月の夜に行われる祭。画を担当する河村文鳳 (1779-1821) は、岸駒に学んだ京の絵師。巻頭に天龍寺長老の峻堂元機が祭の由来を書き、巻末に秋成が和歌を記す。
「没後200年記念 特別展観 上田秋成」で初公開となった作品であり、郷土の祭を描いた本作は、今後様々な角度からの展示活用が期待される。伴資規筆「也須羅比花祭古謡考」(一冊)が附属。
- 購入金額 3,500,000円



- 3 ○種 別 <絵画>
 ○名 称 観音図 (かんのんず)
 ○作 者 等 陳賢筆 即非賛
 ○品 質 絹本墨画淡彩
 ○員 数 1幅
 ○寸 法 等 本紙 縦 31.5cm 横 47.4cm
 ○作品概要 光沢のある絹の絹本に観音菩薩を繊細な筆致で描く。画面の中央右寄りに縦方向に折れ目の跡が見えるので、元来帖仕立てのものを掛け幅に改装したものであろう。
 萬福寺には、同じく陳賢筆による「観音画帖」(崇禎9年(1636)、重要文化財)があり、本図とほぼ同じ体裁の観音図が18図収められている。一般に応化観音は三十三観音を通例とし、その図様はさらに多いはずなので、本図はこの画帖から離れたものであると推定できる。
 本図の賛文は、黄檗僧の即非が「丁酉臘月」、すなわち来日間もない明永暦11年(明暦3、1657)の陰暦12月に長崎の崇福寺で加えたもので、『即非禅寺全録』に隠元に従って渡来した独湛に贈った「題大士影寄湛禅座」として収録されている。



○購入金額 3,000,000円

- 4 ○種 別 <絵画>
 ○名 称 鍾馗図 (しょうきず)
 ○作 者 等 曾我蕭白筆 松波酌斎賛
 ○時 代 江戸時代中期 (1772年・安永元年)
 ○品 質 紙本墨画
 ○員 数 1幅
 ○寸 法 等 縦 127.3cm 横 54.2cm
 ○作品概要 鍾馗は民間伝承、道教系の神で、邪気をはらう力があると信じられた。下方奥に剣がのぞく。太い濃墨線をざっくりと引いて身体を表わし、濃淡のぼかしによって若干の立体感を表わす。帽子や靴は、すばやいたッチの面と線で形づくられ、靴に濃墨を用いることによって下方に重心を置き、安定感を生んでいる。顔の表情は、何とも卑俗で暗い。
 江戸中期、18世紀の絵画界でとりわけ個性的な画風をしめした曾我蕭白(1730~81)の新出作品で、上部の賛は、松波酌斎(1718~93)による。酌斎は、京都の漢学者、伊藤東涯門の儒者で、文学をもって知られた。酌斎55歳、蕭白43歳のときの作で、蕭白と京都の儒者との交流をしめす貴重な一作である。



○購入金額 7,350,000円

- 5 ○種 別 <絵画>
 ○名 称 聖賢図押絵貼屏風 (せいけんずおしえぱりびょうぶ)
 ○作 者 等 狩野山雪筆 林羅山・堀杏庵賛
 ○時 代 江戸時代初期 (17世紀前半)
 ○品 質 紙本墨画淡彩
 ○員 数 6曲1隻
 ○寸 法 等 各図 縦 74.7cm 横 33.7cm 総寸 縦 121.0cm 横 276.0cm
 ○作品概要 張良、呂尚、李勣など中国の聖賢を各扇に描く。身体は抑揚のある中太の濃墨線で簡潔に、顔は極細の墨線によって精細に描き出される。いくぶん無表情で端正な顔立ち、吊り上った切れ長の眼など、他の山雪の人物画と同じ特徴をしめす。



狩野山雪（1590～1651）は、京狩野第2代で、初代山楽のあとを継いで江戸初期に活躍。同時に、きわめて個性的な絵師として、若冲や蕭白らとともに注目を集めている。上部の賛は、林羅山（1582～1657）・堀杏庵（1585～1642）による。羅山は江戸初期の徳川幕府の儒官。杏庵も儒者で羅山の相談役であった。新出の優品であり、羅山・杏庵と山雪との関わりをしめす貴重な作例である。

○購入金額 10,500,000円

- 6 ○種別 <絵画>
○名称 伊勢物語絵巻（いせものがたりえまき）
○時代 江戸時代初期
○品質 紙本着色
○員数 2巻
○寸法等 縦31.5cm 長（上）2430.0cm（下）3025.0cm

○作品概要 『伊勢物語』の全文を書写し、物語性のある章段を絵画化した「伊勢物語絵」の近世写本で、二巻からなる。この絵巻は、これまで紹介されることのなかった新出資料で、構成は完存する最古の写本として知られる小野家本と同じく、詞書は『伊勢物語』のいわゆる定家本系の百二十五段と一致し、このうち四十五段が絵をともなっている。本作品は江戸初期の制作であるが、近世には広く流布する「嵯峨本伊勢物語絵」（慶長13年・1608初版）の図様に影響されない古体を示し、物語の基本モチーフに加え、人物、植物、室内調度等、多くの景物が付加され、絵画的な豊かさをもつ点に特色がある。

○購入金額 8,500,000円



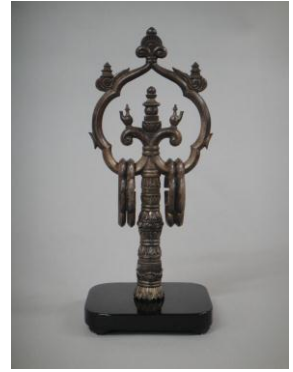
- 7 ○種別 <書跡>
○名称 玉篇卷第九残卷（自嗣字至・字） 紙背金剛界私記
（ぎょくへんまきだいきゅうざんかん しじよりきょうじにいたる しいこんごうかいしき）
○時代 唐時代 7～8世紀
（紙背 金剛界私記 平安時代中期 治安元年<1021>書写）
○品質 紙本墨書
○員数 3紙
○寸法等 縦27.1cm 全長（3紙）168.7cm

○作品概要 『玉篇』は、中国の漢字字書で、南朝梁の大同年間（535—46）、顧野王によって著され、もと三十巻からなるもの。この残巻は、現在、早稲田大学の所蔵である国宝『玉篇』巻第九から遅くとも江戸時代に離れたものであり、「冊部第一百八 凡四字」の最初の「冊」の字釈の途中から「欠部第一百十二 凡一百三字」の第四十字目の「・」字までである。書写年代は唐時代7世紀から8世紀と見られる所謂「唐鈔本」であり、紙背は治安元年（1021）八月に書写された『金剛界私記』の一部であることがわかる。中国では既に散逸してしまい、なお且つわが国にのみ伝存している写本で、「原本玉篇」と云われ、頗る貴重かつ重要な写本となっている。

○購入金額 141,750,000円



- 8 ○種 別 <金工>
 ○指 定 重要文化財
 ○名 称 金銅錫杖頭（こんどうしゃくじょうとう）
 ○時 代 鎌倉時代
 ○品 質 銅・鑄造、鍍金
 ○員 数 1柄
 ○寸 法 等 高19.8cm 輪径8.6cm
 ○作品概要 左右各二か所に括りをつけた、鎌倉時代の典型的な形状の輪をもつ錫杖。輪頂には蕨手の間に宝珠を戴き、上段の括りに層塔を立て、下段の括り近くに三日月形（金剛牙）を表す。輪の下端の蕨手間に五輪塔、蕨手上に浄瓶を置く。穂部は蓮弁を二条隆帯で約した四節からなり、各々の表現をまったく異なる点が個性的である。また左右各二個を遺す遊環も、木瓜形の独特の形状を呈している。注目すべきことに、細部までほとんど形制を同じくした錫杖が存在し（世界救世教蔵、重要文化財）、両者が同一工房で製作されたものと考えられる。精緻をきわめた鑄出と彫金の作行きで、鎌倉時代の仏具製作の具体的な状況まで想像させしめる重要作品である。



○購入金額 60,000,000円

- 9 ○種 別 <金工>
 ○名 称 金銅五鈷杵（こんどうごこしよ）
 ○時 代 鎌倉時代（13世紀）
 ○品 質 銅・鑄造、鍍金
 ○員 数 1口
 ○寸 法 等 全長17.7cm 把長5.7cm 鈷張5.5cm
 ○作品概要 密教修法で、行者が修行を妨げる煩惱等を碎破し、本尊と一体となって修法を完成させるために、掌中に握るべき法具。脇鈷基部に鬼面を彫り出し、また逆刺を禽獣の嘴形とするという特異な造形は鎌倉時代の新機軸の表現で、同種の作例はきわめて少ない。また把の二本の約条に綾杉状の刻線を施し、蓮弁を子弁のない素弁とするという表現は、細見美術館蔵の請来様の金銅五鈷杵（重美）を踏襲している。添状によると明治初年まで比叡山横川の松禅院に伝来し、「弘法大師将来」といわれてきたもので、これは前述の形態的特色とも符合し、密教法具の「将来様」という形制の一端が天台宗側でも伝承されてきたことを窺わせ興味深い。



○購入金額 8,000,000円

- 10 ○種 別 <金工>
 ○名 称 金銅種子五鈷鈴（こんどうしゅじごこれい）
 ○時 代 鎌倉時代（14世紀）
 ○品 質 銅・鑄造、鍍金
 ○員 数 1口
 ○寸 法 等 高19.4cm 把長11.5cm 鈷張6.5cm
 ○作品概要 密教修法で、諸仏を驚覚させ道場へ勧請するため、行者が実際に振り鳴らす鈴。把中の鬼目を大きく膨らむ鬼面とし、脇鈷の基部にも鬼面を現す。脇鈷の張りは強いものの、把と鈴身の蓮弁表現に硬さを認め、鎌倉時代後期の製作とみられる。鈴身には、円相内にカーン（不動）、バク（釈迦）、マン（文殊）、アン（普賢）、バン（金剛界大日）の種子を表す。通例は金剛界もしくは胎藏界の四仏ないし五仏を表し、本品のごとく釈迦如来と両脇侍という顕教の仏菩薩を表すのは全くの



異例に属す。一つの解釈として、これを十三仏のうちの初七日、二七日、三七日、四七日と十三回忌の追善を司る仏とも考えられる。中陰・年忌に十三仏を導入したのが真言宗で、鎌倉時代に変質をきたしつつあった真言密教の事情を物語る重要作例ということもできる。

○購入金額 6,000,000 円

- 11 ○種 別 <金工>
○名 称 線刻水分女神鏡像（せんこくみくまりじょしんきょうぞう）
○時 代 平安時代（12世紀）
○品 質 銅・鑄造、彫金
○員 数 1面
○寸 法 等 径8.8cm 縁高0.2cm
○作品概要 素鈕、山形鈕で断面台形の周縁がめぐり、界圏をもたないいわゆる宋鏡式鏡を鏡胎とし、鏡面に女神の姿をごく細い毛彫で表す。近い図像の女神が男神二柱を従えた姿を描いた鏡像が金峯山経塚から出土しており（重文・東京国立博物館蔵）、それには、「子守三所」との神名も線刻されるので、本鏡像も金峯山経塚から出土した品で、子守明神、すなわち吉野水分神を表したものである可能性がきわめて高い。なお鏡胎は、12世紀前半に製作された楓枝蝶鳥鏡であり、線刻はその特徴から、これより遅れる平安時代末期、12世紀後半に施されたものと考えてよい。

○購入金額 8,000,000 円



- 12 ○種 別 <金工>
○名 称 銅卷龍獸面文花瓶（どうまきりゅうじゅうめんもんけびょう）
○時 代 室町時代（15～16世紀）
○品 質 銅・鑄造
○員 数 1口
○寸 法 等 高28.4cm 口径12.3cm 高台径13.3cm
○作品概要 中国の古代銅器、尊に由来する形の花瓶。下膨れの胴から、やや長く太めの頸がゆるやかに口を広げながら立ち上がる。頸の獸面以外を素文とする代わりに、頸に巻きつくように写実的な龍を耳とする。このような卷龍形の耳は中国銅器に見出すことができず、中国から舶載された唐物銅器を元に、日本で製作された擬唐物銅器とみなされる。卷龍を飾った仏具として知られる聖衆来迎寺や唐招提寺の三具足がいずれも室町時代後半には伝来していたことから推して、本品の製作時期も室町時代とみて差し支えない。

○購入金額 2,800,000 円



- 13 ○種 別 <金工>
○名 称 銅獸面文管耳瓶（どうじゅうめんもんくだみみへい）
○時 代 南宋～元時代（13世紀）
○品 質 銅・鑄造
○員 数 1口
○寸 法 等 高20.9cm 口径（長径）6.8cm 胴径（長径）11.5cm
耳間幅10.0cm
○作品概要 扁平で下の胴からゆるやかに立ち上がった頸のくびれ部に管状の耳を付けた瓶。南宋～元時代の窖藏遺跡から出土する倣古銅器群にしばしば含まれる器形で、中国の銅器研究では貫



耳瓶と呼ばれる。本品は全面に5段の文様帯を設け、上より雨龍文、獸面文（饕餮文）、変形龍文、S字渦卷四菱文、波文を表している。類品中でも、頸が太く全面に細密な文様を表すという古様をみせており、南宋から元時代前期に遡る品と思われる。表面に黒漆を塗っており、日本へ舶載されてから、書院飾あるいは茶の湯の花生や杓立などとして、相当に長期間用いられてきたものとみられる。

○購入金額 1,800,000円

- 14 ○種 別 <金工>
○名 称 銅牡丹文香炉（どうぼたんもんこうろ）
○時 代 元～明時代（14～15世紀）
○品 質 銅・鑄造
○員 数 1口
○寸 法 等 高21.3cm 口径28.2cm
○作品概要 大型の円形香炉で、胴には規則的に展開する牡丹唐草を陽鑄する。三脚は丸みを帯びた短い逆瓢箪形をなす。口は断面箱形の縁帯をなし、その直下に雲文と五弁花文を交互に表している。

南宋～元時代の龍泉窯青磁にこれときわめて近い香炉がいくつも知られ、とくに韓国中央博物館所蔵品は、葉の形が酷似する。元時代ないし明時代初期頃に製作されたものとみられる。なお底には篆字で「官所」と陽鑄銘がある。明治二年の箱書に、明の帰化人で尾張御深井窯で活動した陳元贊（1587-1671）が来日の際に明から持ち来たったとの将来譚が記される。そのまま信を置く訳にはいかないが、近世以前の舶載であることは間違いない。

○購入金額 8,300,000円



- 15 ○種 別 <金工>
○名 称 銅蟠螭文管耳瓶（どうばんちもんくだみみへい）
○時 代 元時代（13～14世紀）
○品 質 銅・鑄造
○員 数 1口
○寸 法 等 高22.0cm 口径（長径）6.6cm 胴径（長径）11.1cm
耳間幅9.8cm
○作品概要 下膨れの胴からゆるやかに立ち上がった頸のやや下寄りに管状の耳を付けた瓶。上・下2段の文様帯を設け、上段に獸面文（饕餮文）、下段に蟠螭文（絡み合う龍文）を表し、脚に巴文（周代銅器の円渦文に由来）と井桁文（同じく夔文に由来）を表す。管耳瓶は、1323年頃に中国江南の慶元（寧波）を出港し博多へ向かう途中、朝鮮半島南西部、新安沖で沈没したジャンク船の積載銅器群の中にみられ、本品はそれよりも形態、文様ともに古い時期のもの。日本へ舶載された管耳瓶は、中世には書院飾、近世には茶の湯の花生や杓立などとして珍重された。本品もその外観の古色から、相当の長期間、茶の湯で用いられてきたものらしい。

○購入金額 2,000,000円



- 16 ○種 別 <漆工>
○名 称 花唐草蒔絵交椅（はなからくさまきえこうい）
○時 代 江戸時代 17世紀半ば
○品 質 木製、蒔絵、螺鈿
○員 数 1基
○寸 法 等 高 66.6cm 巾 37.5cm 奥行 52.5cm
○作品概要 折畳式の椅子。背もたれに挽物製の壺形列柱と連続アーチを組み合わせ、背もたれの上端左右に楯をもつ獅子の彫刻をつけるのは、17世紀前半のオランダの様式であり、西洋製の木地を京都へ持ち込み、蒔絵と螺鈿で飾った異色の家具である。精緻な石畳文、七宝花菱、花唐草などをあしらい、脚部の側面には薄肉高蒔絵もまじえて華やかな鳳凰を描く。蒔絵螺鈿の様式から、1640年代のオランダ東インド会社関係者による特注品と思われる。

○購入金額 60,000,000円



- 17 ○種 別 <考古>
○名 称 銅板押出三尊仏（どうばんおしだしさんぞんぶつ）
○時 代 飛鳥時代 7世紀
○品 質 銅鍛造・金貼
○員 数 1面
○寸 法 等 縦 27.7cm、横 19.3cm
○作品概要 この押出仏は飛鳥時代末頃に大和地域で製作されたもの。薄い銅板を原型となる半肉彫の銅製仏像に押し当てて叩き、三尊仏を浮き立たせたものである。全体は不整形な長方形の銅板で、厚さは0.3cmほどの非常に薄いもの。銅錆に覆われ、暗緑色を呈するが、一部には金箔（あるいは鍍金）の露出が見られる。銅板の四隅と短辺長辺の縁辺部には合計14個の小円孔を持っており本体を木製光背に固定した釘跡と推定される。この作品は奈良県御所市當麻寺奥院に伝来する重要文化財の「押出銅造三尊仏」と原型を同じくする兄弟の作品である。その関係から製作時期や作られた地域、その製作技法なども推定できる。新出作品ながらきわめて重要な作品である。

○購入金額 14,500,000円



以上